

# 西中千人 ガラス展

—呼継と光の庭—

【会期】 6月17日(水)～6月23日(火)  
【会場】 日本橋高島屋 6階美術画廊・美術工芸サロン  
中央区日本橋2-4-11  
☎03(3211)4111

ギャラリートーク 日時：6月20日(土)午後3時より  
対談：鹿村美術織物 四代鹿村平蔵氏×西中千人氏

一度作った器を叩き割り、再び溶かし合わせて継ぐ「ガラスの呼継」。ヒビに美を見出し、「命の煌めき」と解釈する西中千人独自の表現として、欧米でも高い評価を得ている。飛び石や踏にガラスを用いた「光の庭」は、自然と人間のあるべき関係を感じるための新しい庭のアプローチである。展覧会にて「ガラスの呼継」、「光の庭」という伝統から生まれた現代の日本の美の表現をぜひご覧いただきたい。

スペシャル対談

## 森 孝一 × 西中千人

「ガラスの傍さで力強さで新しい日本の美を表現したい」と、金継ぎの美意識を礎に「ガラスの呼継」で独自の表現を追求する西中千人が、美術評論家の森孝一氏と「継ぎ」の美学が生まれた背景にある日本文化の思想と、作家の世界観、そして哲学を語り合った。

**もり・こういち**  
1951年愛知県生まれ。美術評論家、都立文科大学非常勤講師、公益社団法人 日本陶磁協会事務局長。主な著書、編著に『陶芸家になるには』(ベリかん社)、『西山二郷の美蘭』(国文出版)、『文士と骨董』(講談社文芸文庫)、『手の光』(宝島社)など。

**にしなか・ゆきと**  
1964年和歌山県生まれ。89年慶応大学薬学部卒。造米し、カリフォルニア芸術大学で彫刻とガラスアートを学ぶ。海外のアートフェア(NY、ロンドンなど)や日本国内の画廊で展覧開催。国内のみならずスペイン、北欧の美術館・大学に作品収蔵。受賞多数。



「呼継」 高31.5×幅18.5×奥行17.5cm

森 西中さんほどどうしてガラス作家になったのですか。  
西中 ガラスの製造は約五千年前にエジプトで始まり、吹きガラスの技術は十三世紀にベネチアで完成しました。つまり、ガラスは西洋の伝統文化なんです。日本においてはガラスに匹敵する文化は皆無なんです。やきものは縄文からずっと続いていますが、ガラスの歴史はそれほどありません。だから、面白いと思ったんです。森 確かに、ガラスはまだやきものほど市民権を得てないかも知れない。しかし、最近ではガラス作家が増えましたね。ところで、最初はどんな作品を作ったんですか。  
西中 じつは鋳込みの彫刻だったんです。森 すると、吹きガラスではなかった。鋳込みと吹きガラスではもちろん技術は違いますが、西中さんが創作する上で、ご自身のなかではどんな違いがあるんですか。  
西中 脳味噌の使い方が全く違います。鋳込みはほぼ一人でやります。原形を粘土で作って、耐火材で覆って、ガラスを溶かし入れて、鋳型を打ち割って、一人で削って、二ヶ月間、誰ともしゃべらないで、只々、自分の中へ中へ入って行く。吹きガラスはチームワークなんです。大きいものだと四人、五人で、最初に色合わせして、簡単に絵を描いて、あんまり描き過ぎるとその真似をしちゃうので、じやこいう感じで行きますよって、始めるんですが、始めるとまた変ってきます。



森孝一(右)と対談中の西中千人(左)、アトリエにて

森 石の文化は永続性を求めます。土の文化は流動的で変化を求めます。お話を聞いていると、鋳込みの技術はまるで石のようで、吹きガラスは土のようですね。西中 塊のガラスを外にはつたらかしてしまえば、まさに石なんです。化学組成的には御影石とほぼ変わらないし、強度もそうです。自分のなかでもガラスの鋳込みの塊は石の感覚なんです。森 やきものと同じですが、ドロドロとして形のないものが、冷めて行く時に形が生まれる。だから、土もガラスも最初は非常に不安定なものなんです。西中 物理学的にはガラスは液体といわれています。森 まさに地球のマグマと同じですね。そういう意味では、地球の誕生とよく似ています。西中 自分の意思を若干加えることで形を作っていくこと以外は、全く同じです。森 地球の内部には様々な鉱物があり、その鉱物によっていろんな色が生まれてくるのだから、地球上の鉱物を応用して作っているアートだともいえますね。西中 SO2、二酸化ケイ素というの、地球でもっとも多い素材です。だから、地球のかけらを溶かして、私はガラスを作っています。森 その表現いいですね。日本という小さな島国で生まれた西中さんのガラスアートは、是非とも世界に通用する地球規模のアートにして下さい。西中 ミクロとマクロの世界が、ずつと繋がっていくことですね。やきもの

も「緒だ」と思うのですが、「割れる」ということに対して最初はすごく「拒絶感」があった。日本には割れたものを「繋ぎ」という文化があって、それは日本独自の美意識だと思いましたが、日本人は割れたものになんで美を見出したんでしょうか。これは、他の国にはない文化ですね。森 割れたものというか、欠けたものに見出すことは確かです。信楽の壺なんかは、使っているうちに必ず口が欠けますから、欠けている方が自然だとレクターの方はいいですね。だから、欠けている方が完全で、欠けていないと不完全と思うのでしょうか。西中 やきものでは、土物に染付を呼び継ぎした織田有楽斎の「瀬戸筒茶碗」がありますね。あれが、呼び継ぎで一番早いものだとわれています。森 「瀬戸筒茶碗」は細川三斎が秘蔵したものです。割れたものを繋ぐということでは、秀吉が大切にしていた茶碗を小姓が割ってしまったのを、細川幽斎が「伊勢物語」の古歌をもじって救った有名な「井戸茶碗、銘「筒井筒」」があります。その前に、平安時代に作られた、いろんな料紙を継ぎした「西本願寺本三十六人集」があります。こちらは、重ね継ぎ、切り継ぎ、破り継ぎと継ぎ方もさまざまです。王朝びとはそうやって楽しんでいたのでしょうね。蹴鞠はいかに上手に受けて相手をパスする競技ですから、これは勝ち負けを決める競技ではなく、遊戯なんです。連句は前の句の空気を読んで、次の句に転じていく文学ですが、こ



「呼継」 高21×幅45×奥行41cm

れも言葉も繋いでいく遊戯なんです。だから「繋ぐ」というのは、まさに日本の文化なんです。西中 ニューヨークで最初に展覧会に出品した時、ベネチア系の方が、私の呼継を見て、「お前の作品は割れているんじゃないの」と教えてくれたことがあってびっくりしたんです。海外のコレクターさんは、変な発屋のギャグみたいな感じと、割って作った面白いデザインだなどという見方をしてしまうんです。森 修繕ではなくて、「継ぐ」という行為を表現にまで高めたのが光悦で、へ赤樂茶碗 銘「雪峯」の豪快な金継ぎは、まさに修繕を越えた光悦の表現になっています。西中 光悦の書に関して、宗達下絵の料紙に書かれた文字は、手紙の文字とは全く違います。あの文字が大好きなんです。気品があつて。森 謡曲の光悦本は、ケルムスコット・プレスの本に負けない気品のある書物美だと思っています。光悦は、平安時代の装飾性に学んでいるのだと思いますが、ただで上手に取っコペーは作らない。気品だけを上手に取っコペーは作らない。西中 これは勝手な想像なんですけど、もし光悦さんがいまいらして、なにかをされるとしたら、私は土ではなくてガラスを選ばないかと思うんです。長谷川等伯さんの「波濤図」がもの凄く好きだったんです。写真で見ている時はシンプルに見えましたが、現物はもの凄く派手なんです。それを見た時、

「この人、命がけでぶつかっているな」と思った。ところが、「松林図屏風」は全く見えなかったんです。「波濤図」は私の私より若干若い年代の作品で、平均的寿命を考えると同じぐらいの年齢かなと思います。等伯は「松林図屏風」になんか込めたんだと思われませんか。森 実際のところは、等伯に聞いてみないと分らないけど、私が思うのは、松ではなくて余白を描きかけたのではないかと。西中 このヒビもそうなんですけど、色でも金でもなくて隙間なんです。等伯の「松林図屏風」も、もしかしたらこれかなと最近では思っています。森 西中さんの色でも金でもないヒビは、



重要文化財 本阿弥光悦 赤樂茶碗 銘「雪峯」  
17世紀 高9.4cm 口径11.6cm 高台径4.2cm  
嵐山記念館蔵



「呼継」 高36.0×幅20.5×奥行18.5cm



「香伊 呼継」 高13.5×幅12.5×奥行12.5cm

まさに空間だと思えます。熊谷守一の絵で赤い線で輪郭を描いて、その部分だけ塗り残したのがありますが、その赤い線は空間なんです。西中 武道の達人が構える時に、わざとすきを作るじゃないですか。あれは誘い込むための線なんです。森 絆というのは引き算だと思うんです。西中 我々の美に脈々と受け継がれてきた「不完全の美」を、これからも独自の解釈で表現していきたいんです。伝統を過去から解放するために叩き壊し、生まれ変わる。そして未来へと繋げていく。そのために、あえて「作品を割って継ぐ」という手順を踏んでいます。それを世界にアピールしてゆきたいと思っています。(4月8日、西中千人氏アトリエにて)

全部出してしまうたら、絆じゃない。引くことよって、そこに人が入り込める余地が生まれるんです。文章も一番最後の結論を書くのと、師匠からよくいわれました。それは、読み手が発見するもので、そうすれば文章が読み手のものになる。結論を書いたら、ああそうかという感じで通り過ぎてしまふ。だから、文

章は行間、絵は余白、立体は空気にな質があるのだと、私は思っています。日本の場合には縄文一万年の間に培われた共存共栄という肯定の論理ですから、否定の論理からは、間だとか、余白だとか、繋ぐというものは生まれません。大陸と大陸を繋いでいる海だつて、見方によっては地球上の空間だともいえます。西中 我々の美に脈々と受け継がれてきた「不完全の美」を、これからも独自の解釈で表現していきたいんです。伝統を過去から解放するために叩き壊し、生まれ変わる。そして未来へと繋げていく。そのために、あえて「作品を割って継ぐ」という手順を踏んでいます。それを世界にアピールしてゆきたいと思っています。